

〈座談会〉

学生・生徒の校外活動と教育

星野 紅 (女子中学・高等学校教諭)

近藤 十郎 (女子大学助教授)

西尾 昭 (大学法学部教授)

豊田 勝儀 (中学校教諭)

——司会——

山本 明 (大学文学部教授)

——(ABC順)——

学校主催の旅行をめぐる

山本 きょうはありがとうございます。本日のテーマは「旅行と教育」です。

「旅行」と言ってもたくさん種類の旅行があって、大学のレベルで言うと研究の旅行「研究旅行」というのは、ぼくのやっているのではどこかを見学に行くという形の旅行と、それからセミナーハウスというものがありますから、ああいうところへ行行って、半分のちよつとは山歩きをして、あとの半分はセミナーハウスで泊まって、そこで議論をするという形のものがあります。それから二つめは完全なる親陸旅行ということで、四年生の学生でいうと一種の思い出づくりふうな旅行もあります。はっきり言うと勉強の旅行、見学の旅行、それから親陸旅行というふうに大体三つありまして、この三つが交差しているというのが私の経験なんです。

旅行というのは前準備というのがあって、学生さんのほうの前準備というのは、小学校でもやっていますけども、見学の行く先のあらかじめの下調べ研究というか、そういうものが見学に行く前にありますし、それから見学

以外にもその旅行で、例えば卒論の半分書けているようなものを一応皆さんに報告してもらおうということがあります。大体勉強か、あるいは親睦かというふうになってくるし、大學生の場合だったら、夕方からの会というものは大体お酒を飲んでということもあります。

これもまた学生の楽しみかもしれないませんが、しかしながら、勉強してそれから一杯飲むという形を考えていても、初めからもう疲れてきたとか、私の失敗の場合で言うと、海に行くとかあかんですね、海岸に行きますとね、もう潮のにおいで、もうすぐにパンツはいて海へ入ってしまう。あと疲れるからすぐ一杯飲まねばならないということになって、まあ勉強ということとはほとんどできないようになり

ます。それから事故ということもありますね。旅行というのはもちろん集団の旅行もありますし、小集団の旅行というのもあるし、別な形で言うと、学校が主催する旅行、それから個人が勝手に行く旅行というのもありまして、ぼくがいちばん心配しているのは個人の、あるいは小集団で行う場合に、オートバイで行ったりして、私のセミの学生も二年ぐらい前

かな、名神高速で中央分離帯に激突して死亡するという不幸な事故もありましたが、大學生、生徒をどこかに連れていく場合も、事故の問題というのは非常に心配なんで、この間、中国の鉄道事故もありましたけども、ああいふことが起こると大変なので、皆さんご苦労だと思っております。そういうことも含めてさまざまの種類の旅行、あるいはその前の準備の問題をどうされているのか、あるいは事故防止のためにどういうふうにするのか、汽車がひっくり返るといふのはこちらの責任ではあまりないような気もいたしますけれども……。ほかのさまざまの事故があるで、最近特にアルコールの自動販売機があるので、あれは非常にわれわれにとってもぐあいの悪い部分でもあるのですけれども、まあそういうことも含めてまたいろいろなお話をいただければ幸いです。

まずそれぞれの学校でやっておられる旅行、それはフォーマルでもインフォーマルでもどっちでもいいんですけれども、まずそういうことをご報告いただいて、それからそのあとで問題点もお話したきたいというふう

にお話をいただきます。

まず、先生方にお話をいただきたいのは、自分の、あるいは自分の学校の主催している旅行というのどういうものがあるか、大抵どういう生徒、学生が来るのか、それはオブリーションなのか、あるいは任意参加なのかということぐらいからお話をいただければ幸いなんですけれども、星野先生からお願いします。

星野 女子中高では中学、高校、いずれも修学旅行をしております。中学の場合は中二の修了時、高校は高二の修了時、ですから三月の春休み中です。それぞれ二泊三日、四泊五日で、中学は広島、萩、秋芳洞のコースで、萩に二泊連泊いたしまして、萩は班行動、グループ別にいわゆる自主研修をしております。高校は、年によって多少変動はございますが、ここ数年は長崎に二泊、その前になる年があったり、あとになったりするのですが、例えば阿蘇とか九重とか、今年は初めて柳川へ参りました。

それから、これは希望者ですが、夏、中二以上の希望者を対象に戸隠、妙高高原へ三泊四日の旅行がございます。高原で軽いハイキ



星野 紅氏

ングなどを含んで夏季学舎と申しております。また、高校生対象で、三泊と車中泊一泊入れまして、白馬登山を行っております。それから、春休みに、中二と高二が修学旅行に参りますので、高一と中三を対象にそれぞれ百名余りずつスキー学舎があります。いまのところは妙高高原で、四泊五日のスキー研修を目的としております。そういうものが大きい旅行ということになるかと思えます。

山本 たくさんあるものですね。

星野 そうですね。

山本 これはずっともう戦後三十年間毎年やっておられるのですか。場所は違うと思いますが。

星野 そうですね。毎年ですが、夏季学舎は、だんだん先細りと申しますか、希望者が少な

くなってまいりまして、検討の段階にきているなという気がいたします。

山本 どうもありがとうございます。

それではその次に中学ですね。

豊田 校外活動といえはもっと広くあるんですけどね、遠足とかオリエンテーション、合宿とか、修学旅行、キャンプなど、一応修学旅行の関連だけに絞って言いますと、うちの場合は、ちょうど二十年ほど前に修学旅行がいろいろ検討されて、なくなりまして、夏と冬のキャンプに変わりました。中学一年生は京都の由良の浜で二泊三日のキャンプをいま全クラス参加でやっております。由良のキャンプそのものの歴史は戦前からありまして、昭和十一年ぐらいからあります。松山総長も同志社中学時代参加されたそうで、この前、総長が由良に來られた時「なつかしいなア」と言っておられたことがあります。それはあくまで宗教部の主催のキャンプだったのですけど。宗教的色彩が最初は非常に濃くて、聖書研究というような時間もあったんですけれども、最近はだんだんそれが薄らいできて、その辺はまた問題点の一つと思うのですけど。

それから二年生は夏の山のキャンプということで、これも修学旅行がなくなり、その直後は自由参加が数年ありまして、志賀高原のほうへ行ったり、蓼科のほうに行ったり、それから燕も行ったりなんかしているのですけど、それからだんだんかたまって、これも学年全員が唐松へ登る、三泊四日の唐松登山ということになっていきます。三年生は夏の時期はちょうどクラブの公式戦に重なりますので、冬のスキーを戸隠で。これは自由参加ですけども三年生ほとんどが全員参加しています。これも学年行事にしてしまったらどうかという声があります。

戦争直後、修学旅行があったというのは、やはり修学旅行でしかみんなで行けないというところを、学校がいろいろお世話して、行くということだったと思うのですけど、最初の修学旅行は伊豆、東京で関東方面でした。しかし、だんだん個人で行く生徒が出てきましたので、あまり意味がなくなりました。女子中高ではさっきほどのお話では学習が入っていますね、柳川とか萩とか、それならまたそれでいいのですけども、観光だけなら意味がない、とか、いろいろありまして、うちも、

旅館で暴れたり、枕投げしたり、洗面所にスリッパを詰めて水が流れて、二階から一階に水が落ちてきてえらく怒られたりとか、なかなか夜寝なかつたり。

山本 まあ修学旅行とは枕投げだという説もありましてね。

山本 どうもありがとうございます。

それでは女子大学のほうのお話をお伺いしたいと思います。

近藤 女子大学としては、学生部が主催する校外的な活動といえますか、これはもちろん全学生対象なんですけれども希望者だけです。学生部がお世話するのがサマーキャンプですね、それから冬のスキーキャンプ。これは大体百人ぐらい両方とも参加者がありません。それと宗教部の主催でリトリートが春と



近藤十郎氏

秋、二回もたれます。これも参加者がこのごろずつとふえて百名から百五十名、そこにはもちろん学生だけじゃなくて、教職員も自由参加で結構たくさんの方が参加しております。

もう一つは特に夏、これも大学と一緒にだけれども海外の大学とのエクステンジ・プログラムがあります。一カ月近くの期間で、参加者は三十人から三十五人、ことしの七月に出発するのが学部で第六回目で短期学部では二回目です。いろいろ成果もあるし問題点もあると思うんです。

そのほかにこれは短期大学部だけですけれども、オリエンテーション・キャンプが発足、来年三年目に入るわけですけれども、一泊二日のオリエンテーション・キャンプ、これは全員参加です。もちろん先生方も参加します。大学生ですので、学校がいろいろプログラムを立てるといってではなくて、それだけのプログラムは学生が中心になっていく。そのためにそのリーダーとなる学生たちのリーダーズ・トレーニング・キャンプというようなものが組まれておりまして、結構年間忙しく動いております。

学部はアメリカのメアリー・ポールドウィン・カレッジという女子大学、短期学部はイギリスのケンブリッジ大学ウルフソン・カレッジで共学だと思えます。

山本 西尾先生お願いします。

西尾 私はこういった問題について経験が乏しいので、むしろ二、三の点、話題を提供しているいろいろとお伺いしたいと思うのです。

まず初めは、旅行を主とした校外活動と学校の正規の教育とがどのように結びついているかということですね。これもいろんなタイプがありますから一概には言えないと思いますけれども、具体的に言うならば、それが教育という面からとらえたらどういった効果があるかということです。これも非常に時代によって変わるといって、高校では修学旅行を廃止されたと言っておられましたし、あるいはサマースクールですね、そういうものについても参加者が減ってきたというようなお話もありまして、校外活動も時代によって変化するという要素があったり、あるいはまた、私は法律屋ですからこんな殺風景なことを申し上げるのですけれども、そういった校外活動中のいろいろな事故についての学校の責任



西尾 昭氏

というようなことを考えてみると、これもいま申しましたように、学校の正課の教育とのかかわり合いの程度によって、それも変わってくるかと思えますけれども、あれやこれやいろいろな問題があるかと思えますので、そういう点についていろいろなご経験に照らして伺わせていただければ幸いですと思っております。

山本 大学の場合はいちばん大きな行事というのは、これは自由参加ですけれども函館キャンプというのがあって、新島先生が日本を脱出されたところへ行きまして、これは鉄道で行きまして現地解散なんです。だから函館とかそこら辺をちょっと集団で行って、集団で見学もあって、それからあとそこで解散をするので、学生さんは恐らく北海道のほうば

うに散っていくのでしょ、これは非常に人気のあるものです。

それから宗教部でときどき唐崎ハウスでやりますけれども、これはけっこう参加人数はあるんですね、卒業生も来ます。これは宗教部の主催だから、もちろん牧師さんも行って、私も行きましたけれども、わりあいちゃんとやられております。

それからあとの旅行というと、これは学生の自由な旅行とゼミ旅行というのがあって、これはほとんどやっておられると思いますけれども、どうですか、西尾先生のクラスはやってられますか。

西尾 最近の傾向としまして、大学生についていうならば、いわゆる集団的行動を避けるといっていいがあるのじゃないんでしょうか。これは非常に妙な例ですけども、最近、大学周辺のマージャン屋さんが客が来なくなっちゃってね。ああいう娯楽でも四人でかたまってるやるといって嫌やというようになことで、それこそテレビゲームみたいに独りでできるほうがいいというような風潮を反映しているのじゃないかと思えます。

ですから逆にそういった傾向があるからこ

そ、修学旅行という機会に集団行動のルールを学ぶというか、そういう生活体験をすることが必要だと思わなくては、大学生について見るならば、ゼミ旅行というような形よりも、自分独りで、あるいは気の合った二、三の友人と出かけるというふうになっていくんじゃないか、というような感じがいたしませんね。

山本 そうですね。私の世代で言うところ、ちょうど戦争中で小学校、国民学校の修学旅行はなかって、中学に入ってから終戦になりまして、そこで旧制中学、たぶん二年生か三年生ぐらいのときに修学旅行がありましたけれども、これはごく近くのところでした。それから新制高校に入ってから男女共学になって、広島に行った。あとから考えてみると、昭和二十三年に広島に行ったというのは本当にすばらしいことですね、あのころは広島島の原爆というのはほとんど報道がなかったんですね。現地に行ってみると、あんなにきれいだったけれども、修学旅行というのはそういう点では行き先の問題ということもあるのではないかと、気がいたします。ただワイワイと言っ



豊田勝儀氏

こを吸ってということもちょっとしたあとからでは思い出でずけれども、まあそれだけではぐあいが悪いなアということも……つい最近、同窓会があつて高校の先生も何人かいて、そういう話も出てきました。
ということなんですが、一応、皆さんの学校旅行のことを報告いただきましたので、あとは自由を、つまり「成果と問題点」、問題点のほうをお話しいただいて、成果もこういう成果があつたということを気楽にお話しいただければ幸いなんです。

海外の学校への旅

近藤 大学のサマープログラムはどういう位置づけなんですか。これは勝手にだれかがするというわけじゃないでしょう。アーモス

ト大学に学生を……。

山本 ありますね。あれはアーモストサマープログラムですね。それとことしは西ドイツの大学とも提携をしております、西ドイツも行きますし、あれはやる前に担当の先生が学生さんを集めて、一応オリエンテーションがあつて。

近藤 学校としてのプログラムなんですね。

山本 はい、そうです。教授会でも報告があります。

近藤 どこが、例えば国際課とかそういうところが世話するのですか。

山本 はい、事務局は国際課です。

近藤 女子大も一緒のような形で、国際交流委員会という組織が母体です。

山本 これまでのところは大学主催のとうか、そういうもので事故が起こつたということはないですね。何か犯罪に巻き込まれたとか大けがをしたとかということはないんですが、やはり事故で言うところ、個人の旅行がわりあい多いですね。

豊田 大学のサマープログラムというのは、結局どんなものがあるのですか。アーモ

スト大学だけをぼくは頭に浮かべておったんですが。

山本 それと西ドイツのマインツ大学に今年から行きます。

近藤 あと宗教部でしょうね。

山本 そうですね。

近藤 大学全体がするといっても、それは大学の部門が責任をもって、一つの計画を立てて学生全体に呼びかけるということであれば、それはやはり公的な性格をもつわけでしょうね。女子大学でも状況は一緒です。

豊田 少なくとも同志社大学がタッチしているものについて、何か一覧表があつて、学生さんがどれを選ぶか、どれに行きたいかというのを、もう少し手続きとか、どこへ申し込むとかがあればいいですねえ。アーモスト大学なんかは非常にむづかしいと聞いてますが、何か選考があつて。ぼくなんかも大学生から聞かれて、全然わからないわけです。ことし行かれる先生はだれやろということがわかつて、その先生に電話してみたいような言い方で、前に、困つたことがありました。

山本 そうですね、教授会で一応の報告はあるけれども、あとのPRやとかなんかとい



山本 明氏

うのは、それぞれの委員会とかに任せてますね。

西尾 そうですね。だから印象としては純然たる課外活動といった感じがしてますね。

近藤 修学旅行でも、学校としてどこの部門が担当するにしても、公に出す場合には結局その一つ一つのプログラムがどういう位置づけで、先生がおっしゃったように日ごろの教育とどうかかわっているのか、その効果はどうかというようなことははっきりさせる必要があると思います。位置づけがしっかりしていないと、何となくそこに精力が注がれない、参加する学生も減ってくるということになるんじゃないでしょうか。

西尾 いわゆる小学校を含めて中・高における修学旅行というのは、やはり正規の教育

の一部分というふうな位置づけられているのでしょうか。

星野 はい、期間こそ春休みでございますが、全員参加と考えております。

ただ、最近では九州は行ったことがあるとか、団体行動はうっとうしいとか、数万円がもったいないとか、そういうことで行きたくないという生徒があったりした場合に、わりあいに簡単に親がそれに理解を示しまして、「じゃ、行かないでいいわ」ということになってしまふのです。で、担任がいろいろ説得するのですが、親が一たん子供の味方につきますと、いろいろ新しい理由を考えてまいりますので、担任が苦勞することもあるようです。まだいまの段階ではそういう生徒はごく少数ですが。

豊田 うちの中学校も欠席するということに対してはものすごく厳しいですね。だからうまく位置づけができていくかどうかは別にして、やはり位置づけしているつもりだと思っただけです。中一、中二のさっきの全員参加のキャンプの場合は、出席日数に入りますし、授業と同じ扱いですからね。全員参加ということは出席日数に入り、それを例えば個人で

旅行、親と一緒に海外も含めて旅行に行くためとなっても絶対に認めないです、うちは、授業中に行くのかとかということ。

それぞれ実行委員会があり、やるたんびに面倒な反省会があり、というような形をとっています。

近藤 それはオリエンテーション的な意味をもっているわけですが。いわゆる修学旅行の場合には、いままでの学校の生活の総反省というか、友情を確かめるとか、まあ具体的な目的が幾つかあると思うんですけど、一、二年生の場合にはオリエンテーション的な……。

豊田 いえ、オリエンテーションの時期はもう過ぎていきます。うちの学校はことしから初めて中一対象にオリエンテーション泊合宿をやりました。同志社高校もオリエンテーション合宿はやっているんですね。うちがやった同じ場所で数日遅れてそこへ来られるということでした。

山本 どこですか。

豊田 近鉄の寺田駅の近くの青少年野外活動総合センター友愛の丘、笠川良一の何か(笑)……。

これもちょっと余談になりますけど、探し回って、どこを探しても国旗掲揚しなければならぬ所が多いんです。京都府の關係は。それでないと言えは友愛の丘しかなくて、施設はあんまりいいことなかったんですけど。だから夏の時期はオリエンテーションというよりは、まあ教室以外の課外活動、一緒に泊まって同じ釜の飯を食って集団生活ですね、教室でできないそういう集団生活の中で友情を深めるとか、それともう一つは自然に接する。海なら海、山なら山の自然に接するという二つぐらいを目標に置いています。

近藤 なるほどね。

星野 多少オリエンテーション的な意味をもっているものとして、先ほど申し上げたほかに、中学一年生の五月ごろ、宗教部の主催で「中一修養会」を唐崎を利用してやっておきます。それは一泊と申しまして、午前の授業を済ませて午後から出発しますので、正味一日です。梯田方式と申しますか、クラスごとに順番に出ていって、向こうで交歓会をして入れかわって帰って来ます。これは修養会ではありませんが、やはりオリエンテーション

的な意味はあるかと思えます。

ただ、まる一日ですので、非常にスケジュールが過密になって生徒も疲れますし、そのための準備がまた大変なんです。入学後すぐその準備を始めなくちゃいけない。もう少しゆとりをもたせてやってはどうかということ、いま検討中です。あるいは二泊三日ぐらいの「修養会」が実現することになるかもしれません。

近藤 それは結局順番に全員が一学年参加するということですか。

星野 二泊三日の場合はやはり学年全員一応連れていって、その中であるときには全体、あるときにはクラスごとのプログラムとということになるかと思えます。

山本 女子高の場合は、ぼくも妹が女子高でしたし、娘も女子高なんですけれども、わりあい準備がね。例えば萩に行くというと、萩の地図をかって教師に提出しなければならぬとか何かいろいろあって、うちは二代おりますから詳しく知っていますけど、わりあいうるさい感じが……(笑)。

星野 中学の場合はかなり大きいノートを与えまして、そのノート一冊ぎっしりなるぐ

らい調べさせます。

山本 そうらしいですね。だから、そういう点では大学はないわけですよ。とにかく結局は懇親というか、親睦というか、深める。場所をこちらがちゃんと選ぶと、それはそれなりに興味があつて行くわけですから、大学

の場合、その問題はあまり起きてこないと思うんですけども、高校段階で言うとうと、ある高校の生徒が家には修学旅行と言うと、実は二、三人でどこかへ勝手に行ってしまったということがちょっと問題になったりしましたからね。どこの高校でもそういうことがありまして、問題が非常に先生方の気を遣われる部分だと思ふのですね。

星野 そんな事件はないですけどもね。

豊田 中学はないですね。

星野 はい。やはり消灯時間が守れないとか、ある部屋へ集まって騒いでいたとか、そういう事件は毎年のようにございます。

山本 そうですか。ぼくは京都市の北山通りの近所に住んでいるんですけども、あんなどこに旅館がありましたね。何でこんなところに旅館があるのかと思ったら、これは修学旅行用なんです。つまり三条、四条のにぎ

やかなどころでは先生方は心配だし、どこに行ってしまうかわからない、北山通りだったら行くところないですよ、というのでちよつと繁盛している(笑)。その傾向はどこにでもあるんじゃないでしょうか。つまり泊まるどころをちよつと離れたところにおいてとか、まあ生徒が阿蘇観光ホテルに入れられたら、もうどこにも行けませんね。

星野 そうです。高校は長崎のホテルに二泊しております。ホテルですから二十四時間あけっぱなしなんです。一度、夜、向かいへ飲み物を、コーラか何かを買いに外出した、ホテル自動販売機がないのですからね、というようなことはございました。その程度です。

近藤 ちまたで聞くようなことは同志社の学校にはないんですね。

星野 まあそれは教師が知らないだけかもしれないけれども(笑)。

近藤 そういふのは冒険でおもしろいかもしれませんが、問題が起きないように気をつける面と、問題が起きるかもしれない、しかし、それ以上の収穫があるという面から修学旅行とかそういう校外の旅行を計画されるわ

けでしょう。集団生活にも適用できなくなつてしまつている子供たちに、集団で行動したり、あるいは人と対話したりする喜びとか、そういうところで学校を離れてお互いの友情を確かめるとかという、そういうものはやはり私はこれからもいろんな形で用意されるべきだと思つてすけれども、それは大学生についてとも言えるんじゃないかと思つていますね。

近藤 孤立化してしまつて、それこそマージャンの相手を探すのが難しいというようなそういう現代の若者の行動の中でね、実際はそうじゃないんだ、だれかと一緒にいると楽しいし、自分が充実するというような経験をしたいだくようなプログラムというのは、教育の問題と結びついてくると思つてすけれど。

豊田 西尾先生とはゼミ旅行はないわけですか。

西尾 そうですね。それは年度によつて、その学生次第ですね。そういうことをしようじゃないかというところに入りますと実行されますし、皆がだまつておればそれつきりという。

豊田 学生側から出てくるのですかゼミ旅行というのは。

西尾 ええ、そうです。

山本 ちよつと出てくると、そこに教師が何年か前に行つてよかつた、去年はあそこに行つてだめだったとかね。

豊田 教師側から行かれることはないんですね。どこかへ集中的に集めて集中勉強するような。

西尾 セミナーハウスとか。

山本 それはありますよ。ぼくのゼミでしたか二年前は宝塚に行きましたね。宝塚には宝塚歌劇の記念館というのがあつて、いろんな資料が置いてあるんです。そこを見て、それからちよつとした小さな教室があつて、その教室で「日本近代化と宝塚及び阪急電車」という講義を私が一時間ぐらいいやりました、それからあと宝塚の歌劇ですね、それからあと宝塚ホテルでしたか阪急電車の副社長の招待宴がありまして、ちゃんとしたコースの食事を頂いて帰つてきました。

豊田 先ほどのお話では、だんだん出す学生が減つてきた、いわゆる個別、自分だけで行動するようになってきたという傾向で

すか。

山本 いや、そうでもないと思いますが、クラスで言う前に何人かで行くこう行こうというのを、食事のときなんかに言っているんじゃないかと思うんですね。だけど、年によってね、仲よしグループがあるゼミと、そうじゃなく全部バラバラというのがあるんですね。

豊田 中・高の場合は強制的ですから問題ないとしても、マージャンするのになかなか集まらんというのを聞いて、ワー！そこまでいまの大学生はいつているのかな？と思っぴっくりしたのですけど。

修学旅行のむつかしさ

星野 多少関連あるかもわかりませんが、数年前に、高校の修学旅行についての生徒のいろんな不満が耳に入ってまいりました。担任の先生が非常に指導がしにくいということ、検討委員会をつくりまして、まずアンケートをとったのです。修学旅行を経験してない高校の一、二年生と、もう経験済みの高三と、それから保護者と教員の四グループに分けてアンケートをとりました。保護者は

学校の主催している従来の修学旅行を支持するという方が多かったようです。おもしろかったのは旅行前の生徒たちは、例えば行き先について九州というのは、大阪の公立中学が行っているところなんです。で、それと同じのはダサイとか(笑)、じゃどこへ行きたいのかというと、アメリカとかヨーロッパ、それから北海道とか沖縄、あるいは東京もございましたし、信州でスキーをやりたいというのも、もういろいろ出てまいりまして、中には数人のグループでそれぞれ勝手にてんでバラに行ったらいいというような意見などもありました。結局は行き先を自分たちで決めたいんだらうということがわかりました。

ところが、旅行を経験した高三のグループは、非常に旅行がよかった、それも北九州がいいという意見が圧倒的なんです。このアンケートをとる前には、あるいはこのような二百八十名の団体が一勢に移動する形の修学旅行というのは、もうやめる時期に来ているんじゃないだろうかということも考えておりましたが、経験者から圧倒的な支持を得ました。幾つか申し合わせをいたしました。それは生徒の自主研修に重点を置くということ

と、日数と費用に限界を定めて、行き先や期日などについては、高一の段階から、できるだけ生徒を含めて検討を始める。これにも問題はございます。というのは実際に修学旅行を実施するのは高二ですから、高一から高二へ担任が変わると高一の段階で重要な事が決めにくいというような事がありますし、それからまた、二百数十名が移動するととなると、少なくとも一年前に宿なんかを押さえておかないと適当な場所が取れないわけなんです。いろいろ問題はございますけれども、とにかく生徒を含めて高一の段階から検討を始めるようになって、生徒の不満は減ってきたように思います。

西尾 そうしますと、修学旅行の内容についての生徒の不満というのは、主として行き先の選択という点にあるんでしょうか。

星野 この形で数年やっておりますけれども、やはり従来やっていたと同じように春、北九州方面に行くのがベターだということになってしまふんですね。

自主研修に重きを置くとすると、例えば沖縄などを選びましたときに、非常に行動の範囲が限られてやりにくい、交通機関も不便と

いうようなこともあるかと思ひます。結局、結果としては従来とあまり変わりない。ただ、長崎を連泊にして自由行動の時間を十分にとっている、そのぐらいでしょうか。

山本 このごろ京都へやってくる高校生、まあ中学生もいるかもしれないませんが、修学旅行というのはほとんど変わってましてね。ごく最近のは京都にやってくる皆さんと同じ宿に泊まるんだけれども、市内はタクシーで回るんです。これが四人か五人のグループに生徒さんを分けて、その生徒さんがどこを回るかというのはそれぞれのグループの勝手であつて、しかも何時に旅館に帰つてこい、ホテルに帰つてこいというのはもちろんタクシー会社に言うておきますから、これはいちばん事故がないということではないやつていふんです。高校の先生、校長先生が非常にこれを気に入られて、校長先生の会合のときにこれをおっしゃつたもので、毎年どんだんふえるんだそうですよ。修学旅行はバスで行くというのが違つてきたということが非常に大きな変化なんだそうですね。ただ、旅館は一緒ですから枕投げはするし、まあ枕投げがいかにかというたら、またこれどうなんでは

ようね。あれは修学旅行にひつついているようなものなんです。

星野 そうだと思ひますね。やはり時間に制限なくいろいろなおしゃべりをするというのが非常に楽しみなようです。

豊田 修学旅行はうちがなくなつて女子中高が続けておられてる、集団活動をするとか宿泊するというのは同じですね、キャンプにしても。うちがなくなつたのは、やはり修学旅行というテーマが非常にはつきりしなくて、集団でワーワーと連れて見に行つて、夜はなかなか寝ずに騒いでというんで、体もあんまり疲れないし……。山へ登る、海で泳ぐ、これははつきりして体も疲れますしね。寝なかつたらあした泳がさないと云つたら寝ますからね。なお変わらなずに統括しておられるのは、やはり事前指導とか学習とかという面を非常に強めておられるですね。同志社国際高校もだいぶ勉強して沖繩へ行きますね。山や海はそう事前指導は要らんです。一回や二回トレーニングしますけれどね。田辺のプールで一応泳いで、山は比叡山に登らせて、比叡山のもっと高い山でも信州のほうは涼しいですから、しんどきは比叡山ぐらいな

んです。比叡山でバテなかつたら向こうも登れるという、そういう一回だけの予備登山、事前指導はしませんですね。修学旅行はどの山の場合にはせつかく行つても雨が降る場合があるので、二日とつてありましてね。いっぽうの天気のとくに登つて、そうでないときは近くの自然園の観察へ行くんですが、それもちよつと学習的なことを加えているんです。山へ行つて星の観察をするとか、地形の観察をするとか、由良も実際はいま水遊びだけで泳がしているだけですけど、もう少し磯遊びのような、貝をとったり魚を見たりということが出来ないかといった声は出ているんですけれどね。まだ取り組みはないですね。

星野 高校の場合は、さつき申し上げたみたいに山へ登る学年があつたり、それからある年は冬スキーに行くような学年があつたりしてもいいようにしてあるんですけれども、何か新しいことをするのは大変なのか、妙に結局いまままでおりが続いております、結果的に見て。

山本 修学旅行というのは、この間、亡くなった桑原先生の論文に書いてありますけれど

ども、日本のように修学旅行というのを非常に大切にしている国は少ないですね。ヨーロッパの高校がイギリスに行くとかというふうな海外旅行というか、まあヨーロッパは狭いですが、という形は結構あるんだけど、国内で回るとかというのはほとんどなくて、桑原先生は、これは非常にすばらしい伝統であって、と同時にまだから修学旅行用に国鉄は三人掛けの電車もつくるし、近鉄のようにああいう形の修学旅行の電車もあるしということ、非常にすばらしい習慣ではないかということ、何をたしか何かの論文で書いておられましたけれども……。

話はちがいますが、私はゼミの学生と明治村に行ったのです。結局はぼくはあそこで石川啄木の散髪屋というか、啄木の一家が下宿していたところがあって、そこに案内して、啄木の当時の生活をお話をしようと思ったんだけど、行ってみたら学生はそんな山本の啄木論なんかあんまり聞きたくないようでした。それで「ちょっと集まってくれ」と言ったんだけど、なかなか集まらないしね、結局は楽しく園内の汽車に乗ったりするのが

いいのであって、ゼミ旅行に対する学生の気構えと教師の考えとは違うんですね。

西尾 そうでしょうね。つまり教師の求めている価値と学生が求めているそれが、年齢上の違いもあって大きく食い違うことは感じますね。

山本 ありますね。

近藤 修学旅行ということになると、消極的な立場から言う問題が起きないように、全体的な行動が一条乱れぬように行くという価値観というのは、ぼくはもう少し古くなっているんじゃないかなと思うんですね。いまの子供たちはやはり先生がおっしゃったように、自主参加というか、つたないけれども自分たちがプログラムをつくるのに参画したという意識をもつことが、自分の充足感につながっていくと思うので、やはりそういう意味では修学旅行は星野先生のところでは成功していらっしやると思いますね。

ですから例えば場所の問題にしても、多くの子供たちはもう何回もそんなところへ行っているわけですから、場所そのものに魅力を感じるといよりは、集団の中で自分を発見したり、隣人を発見したりするという経験が

やはり行った学生、高校生たちのプラス評価につながっているんじゃないかなと思うんですね。そういう点からいくと、私のところの女子大学で幾つかのプログラムをつくっているわけですが、大学生に対してこれだけやるのは過保護じゃないかなという気もしながら、わりと全学的に開かれたプログラムをさっき申し上げたように持っているわけです。その中で学生たち、いまの若い人たちはお仕着せはだめですね。ですから自分たちでやれと、まあ百人のプログラムをつくるためには大体三十人ぐらいのリーダーが要りますね。そして「リーダーになってくれないか」と言うと、学生たちは、すすんでその役を引き受けるし、リーダーになりたいための競争があるぐらいにこのごろなってきました。そのリーダーを選んで百人のキャンプ、あるいは修養会というか、リトリートというんですけど、それをやるためにリーダー研修みたいな企画をします。講師を探さず、講師の問題についても学生が意見を言う、プログラムの持ち方、それからテーマの設定の仕方というようなことで、学生たちはそういう自分を見つけていくチャンスがなかなか自分でとれ

ないというか、あるいはそういう意味では飢えていたのか、そういう面が非常に強いと思うんです。そして一つのプログラムが終わったその段階でもう次のプログラムについての情報なり準備が始まるような感じでした。

私のところのプログラムはわりと目的がはっきりしてますから、特にリトリートは宗教部が主催するものですので、いままでやってきたリトリートのテーマというのは、例えば「同志社と私」とか、あるいは「青春の生き方を考える」とか「自己発見の旅」とか、そういうテーマを設定して、わりと期間は短いんですけども、行った学生はそういうテーマに向かって非常に食いついてきます。一晩じゅうしゃべっています。そういう場所がないんですね、いま。そういうテーマというのは、いまの若者たちには疎遠じゃないかなと思われがちですが、実際はそうじゃなくて、人生をどう生きていったらいいとか、自分をしっかり見詰めてみたいというような意識は非常に強い。そういう意味で私は若者に期待がまだできる。希望がもてると思うんです。そういう面では女子大学でのいろんなプ

ログラムは、ある程度の成果を見ているんじゃないでしょうか。もちろん問題点はあると思うんですけど。

西尾 そうですね、学校の校内という日常の教育の場所から、非日常の世界、あるいは空間へ移ることによって、そこにまた新しい別の教育といえますか、学生、生徒の動きができてくる、そういったところにいちばん大きな意義があるかと思えますけどね。

近藤 日ごろの学生たちの会話では、そういう問題はちよつとやはり触れにくいんだそうですね。学生たちの話を聞くと。ようおしゃべりはしますけどね。そういう自分の本音にかかわる部分とか悩みとか生き方の問題というようなことになる、なかなか日ごろのおしゃべりではそういう問題に触れられない、しんどいテーマなので。外に出てみるとわりと同じような問題をお互いに抱えていることがわかるのですね。

西尾 例えば同じことでも、昼間の発言とまた夜の発言は違いますからね。当然そういう場所なり時間が変わるとなったら……。

豊田 もうちよつと具体的に言うくと、どんなプログラムで、募集の形態から参加される

先生方の人数とかはどうなんですか。そのスケジュールみたいなもの。

近藤 大体リトリートの場合には一泊二日です。サマーキャンプの場合にはこれは毎年行われているわけですけども三泊四日でしょうか。もちろん遊びの部分もありますけど。リトリートの場合には昔は修養会と言ってましたので、文字どおり修養会なんです。まじめに講演を聞いたり、あるいは学内の先生方に発題してもらおう。そして小グループでディスカッションをするというふうな、しんぎくさいから集まらんかなと思うと意外と集まらんですね。学生たちが自分で企画すると、「あんたも来てみない」と自分たちで誘いますからね。そうすると、ああ、行ってよかったですから。そういう話し合いができたというふうな評価があとから出てきますから、今度は行けなかったけれども、春、秋ありますのでね。秋に行こうかというふうなそういう雰囲気ですね。

もちろんそういうことのためには先生方の協力が必要です、学校全体としての。学生が百人行けば、先生方は二十人ぐらい参加します。するとやはりゼミなんかで話せなかった

先生方との、先生の生き方はどうかでですね、わりとそういうことまで話題になりますね。

豊田 先生の確保はそんなにむつかしくないんですか。わりに自発的に、行ってやろうと……。

近藤 そうですね、わりと自発的に。学生たちから誘いに行くんです。「先生、私たちと一緒に行きましょう」と。そしてたやはり研究が忙しくても、そんなら学生のためだったら行ってやろうかというような、やはりこれは信頼関係の問題ですけどね。

豊田 やはり学生が企画するから盛り上げてくるんですね。

近藤 ぼくらがお願いと、まあ、また仕事が一つふえたと思うでしょうけど（笑）。学生からいわれると、やはり先生というのは学生がかわいいですから、行ってくだざる先生が何人か。

山本 日本の旅行で一つエポック・メイキングな事件というのがあって、これは昭和四十五年に始まったというか、ブームとして始まったディスカバー・ジャパンなんですけど、ディスカバー・ジャパンというのは、二

つの意味がありましてね。一つは自己発見ですね、自分を発見する、しかも日常生活ではなくって、よそに自分を持って行って、そこでのいろんなものを見て、あの場合で言うところ、つまりちよつと古いまちなんかへ行って、あるいは永平寺とかああいところへ行って、そこに自分を置いてみて、この長い日本の歴史の中で自分はどういう位置にあるのかということを一ぺん自分で発見してみようという呼びかけですね。それが自己発見の非常に大きなテーマなんです。

もう一つは変身ということがあります。つまり非日常の中に自分を置いて、自分を服装も気持ちも変身させて、そこでということが非常に旅行がはやったというか、旅行ブームになった原因の一つだと思ふんですね。例えば会社の部長が何かゴルフの格好をしてふらふらと歩くということ自体が本人にも解放感があり、一緒に行く人も解放感があり、ということで大ブームになったと思ふんですけども、その自己発見のお話をしましたけど、大学ではどうでしょうね。変身という感じがありますか、ゼミ旅行で。

西尾 そうですね、社会人のように日常のいろんなルールに縛られているということは別ありませんから、それは目立った顕著な変化はないように思いますね。

山本 だけれどもゼミ旅行に行ったりしたら、もう一年半ほどゼミでつき合っているんだけれども、あれ、こういうことがこの学生にはあるんだなアと思ったり、それこそ一人の学生をもう一回見直すというか、せっかく信頼していたけれども、これはあかんアと思ったり、いや、しっかりしていると思ったりね。ずいぶん学生さんが違って見えることがありますね。

西尾 ただ、大学ではいわゆる修学旅行というようなシステムはありませんけれども、各クラブで一緒に行くとか旅行に行くとか、こういうのがそれにかわるような役割を果たしているんじゃないかと思ったりしますね。

例えば一つの例を申しますと、大学の法学研究会という会がありますけれども、これが毎年夏になりますと、「移動法律相談」ということで各地方へ行きまして、そして無料の法律相談をする。それはたいへん地元にも歓迎されてね、マスコミの方が報道してく

れたり取材に来てくれたりしてくれまますのでね。もちろん学生にとって法律の勉強になるということとは当たり前ですけれども、それにいささかなりともその地元の人に喜ばれる活動にもなり、それからまたさらに先ほど山本先生がおっしゃったように、メンバー相互の親睦といいますが、いい思い出を作るといふような役割を果たしているというようなことを考えますと、修学旅行にかわるものはそれじゃないかと思ったりいたします。

それについては法学部の場合、法学部の先生方が非常に協力してくださってね、当然同行しないといけませんから。というのは、法律相談と言っても学生だけじゃとうてい処理できませんから、それをまた先輩なり、あるいは同行した教師がアドバイスをするというようなことにもなりました、そういった意味において、また教師と学生、あるいは先輩とその学生との結びつきをつくるという意味においても、それは一つの大きな効果があると思えます。

豊田 必ずついていかれるんですか。

西尾 ええ、それはついていかなないとどうして現実には学生だけでは処理できませんか

ら、何が出てくるかわかりませんが、まだまだ学生は未熟ですから、それは無理です。したがって、それについて先輩たちも協力しながら、先輩としていま弁護士をなさっている方とかそういう人はたくさんいますから協力します。それで先輩、後輩の結びつきにも役に立つというような感じがいたします。

豊田 運動関係の大学のクラブの合宿みたいなものですね。

西尾 ええ、そういうみたいです。

豊田 それもついていかれるんですか。

西尾 運動部のほうはよく知りませんが、やはり同じだと思いますね。やはり先輩としてアドバイスもし、いろいろ技術指導もあるかと思えますのでね。

山本 法律相談はええかげんなこと言えませんからね。向こうは、大まじめに来ているんだから。

学生・生徒のグループ旅行

星野 同志社高校も修学旅行はおやめになったけれども、クラブの合宿とか旅行はかなり盛んにやっていますというようなのは伺っております。

豊田 らしいです。同志社中学は一切認めないんです。クラス及びクラブの宿泊を伴う行事は認めないんです。同志社高校は認めるんですね。向こうが認めてこっちは何で認めないのかという声はあるんですけど、やはり年齢の違いがありますから。

星野 私どもではクラブの合宿や旅行もやはりあるんです。何でもやっているという感じですけども。

山本 それは教師が付き添う？

星野 そうです。

豊田 事故が起こった場合にね、ついてなかったら大変ですから。

星野 はい、それは必ずつき添うことになっています。それも危険を伴う場合は、十名に一人はとか。以前、それがふえ過ぎて、つき添いの手当がつかなくなりまして、一時中学を制限して中学生はだめということにしたこともありますが、また復活いたしました。

豊田 いまはいいんですか。うちは絶対だめですね。

山本 絶対だめというのは何せですか。

豊田 認めたら大変なことになると。ます

認めるということは、やはりいま言われたつき添いを完全にやらなきゃならない。

山本 そうですね。手当もしなきゃならないですね。

豊田 百人のテニス部に一人の顧問でほんとうような、テニス部が百人行くということを確認すれば、それだけの人数の先生を確保しなきゃならない。できないですね。手当も全部、宿泊費から日当から出張費まで出さなきゃならない。これは経済的にも無理で第一先生の確保ができないでしょうね。

山本 そうでしょうね。

豊田 先ほどのキャンプでも、何名の生徒に何名と八十名の由良のキャンプに七名の専任がついていきますね。プラス補助大学生というのが七名、十四名で八十名の生徒の水泳をやりますから、大体そういう人数なんです。クラス遠足なんかは四十名で行く場合に、一人の教師で行く場合、できたら二人つけてくれと言われますね。プールなんかへクラスで行く場合は、これは二十名に一人がつかなかったらなかなか許されないと。

西尾 また法律的な話になり、申しわけないんですけども、やはり中学生ということを

考えますと、年齢的に見まして、ちょうど単独でそういうことをさせるについて保護者なり学校の責任という問題が、非常に大きくかわってきますから、どうしても慎重になっていると思うんですね。いま中学三年生といえますと、年齢は何歳ぐらいなんですか。

豊田 十五歳ですね。

西尾 ですから十四、五ぐらいが限界になりますのでね。それ以下の場合にはやはり保護者なしの学校がかなり強力に監督といえますか、見なければいけない責任もありますから、それとも関連すると思えますしね。

豊田 海外に関しては、例えば大学の場合には同志社大学も女子大学もあるということと、中・高はないですね。

星野 そうですね。

豊田 例えばこの間ぼく、新島学園へ行きました。新島学園中・高では特に高校生が対象としては二本ありますね、イギリスとアメリカと。学校が学校行事として認めている。特にイギリスのほうは出張の手当も出していつてもらっている。アメリカのほうは向こうの宣教師のアメリカ人が自主的にやっておられるけど、すべて学校を通して申し込んでい

る。同志社の中・高は、ないですね。

ぼくら個人でやっているのがあるんですよ。同志社高校や国際中・高そして中学校の先生が個人個人で女子中高の先生は今年は参加されませんでした。これはある会社と提携してニュージーランド、オーストラリア、イギリス、アメリカの各地、ホームステイ・プログラムですけど、これは学校と全く関係なしにです。出張費等の費用は一切学校からもらわずにね。連れていくのも女子高生や平安高校生を連れて行きますし、よその京都の公立の高校生も連れていきますからね、同志社中学とは関係なしにです。

山本 高校生で、高校生時代にホームステイを向こうで一年間やってこられて、だから一年遅れて大学に来る人がおりましたね。こういうののしっかりしてますよ、皆さん。それと同時にぼくはアメリカの教師もしてきましたから、日本にホームステイで来た女子学生もいますね。これもなかなかしっかりしてますね。あの時期のホームステイというのは非常に大きな影響があるんじゃないかという気がします、ホームステイと言っても一週間ぐらいのホームステイで行く学生もいます。

その学生の報告では、おもしろいこともいっぱいあって、アメリカでホームステイをひきうける家庭は、昔はわりあい経済的に上のクラスだったんですが、このごろどんどんそうじゃなくなってきた、ぼくのゼミの学生がお世話になったところはタクシーの運転手さんなどで、そこにホームステイして、おぼさんというのは、ごっつい太ったおぼさんで非常に親切で、庶民の親切さみたいなものを丸出しにした人だったそうです、ご主人は運転手さんだから飛行場までちゃんと最後まで送ってくれて、その飛行場のとこで、ごっついおぼさんが「最後にキスをしてあげよう」と言ったので、うちの学生は下手くそな英語ながら「自分は日本でまだキスをしたことがないので、ファーストキスをおぼちゃんとするのは気がむかない」と言って断ったそうですけどね。

そういうおもしろい話もいっぱいあって、外国に行った連中、例えば運動部で去年かな、ぼくのゼミの学生が試合で韓国に行きましたけど、その話もずいぶんクラスで聞きましたけど、これはこれなりに、つまりわれわれの韓国観を、そういうことがあったかということ

でずいぶん学びましたし、あるいは行った学生が、「終戦直後に大阪でやみ市というのがあったということ自分を分からは聞いてるし、以前先生に聞いたら山本先生がいろいろ話してくれた、それと同じことがソウルにある、これはびっくりした、日本の自分とはにかく、未来に行くんじゃないで過去に戻った感じがして、非常におもしろかった、つまり歴史の勉強にもなり得て、よかった、よかった」と言っておりましたし、食べ物話も、これは文化人類学的に興味のある話でした、つまり何ていうか、元日本の植民地であったところの日式の食物というのについて、彼は盛んにノートをとってきたのですが、植民地になると、もとの宗主国の食べ物に向こうに行って、現地風になるのだそうです。それを日式ということ。

西尾 そうです。たとえば、韓国では、韓国風にアレンジしてある。

山本 アレンジした日本料理を日式と言うんだそうで、だから日本料理は日本料理店で高い値段であって、それと大衆の日式の食堂というのがあって、それから中式というものもあるんだってね。

西尾 はい、中式。
山本 という話がぼくのクラスでも非常に受けましてね、ヘーと。日式というのは聞いたことあるけど、中式というのがあるのかとか、そういうおもしろい話もありまして、意外に学生さんの海外旅行はいい話を皆さん持って帰ってくるというふうにはぼくは思います。

近藤 女子大学としてのプログラムをこういうふうにか持っているということについては、特にサマープログラムということに關していえば、海外に学生たちを送り出して、いろんな海外での生活体験をしてもらうということについての学生たちのニーズも非常に強いですけれども、やはり保護者というか、家庭の希望が多いですね。

三十人前後の学生を対象にアプリケーションをとりますと、大体七十人から八十人の応募者がありまして、選考しなくちゃならないですね。どこにその選考基準を置くかというようなことでディレクターになった人たちはずいぶん苦労するわけですけれども、行ってみて向こうでの生活体験というのは、これはやはり意識の変革を迫られるというのか、いろ

んな外国についての知識や情報は持っているのだけれども、実際に行ってホームステイなんかをしてみると、本当に身をもって異文化に対するショックを起こす、そのことを通して自分自身の祖国というか、自分の文化を見直すというようなことが依然としてあると思います。そういう体験というのはこれから大学として持つていく必要があると思うのですけれど、そういうプログラムが中・高なんかでも考えられていらっしゃるのかがどうかです。あるいはそういうものはチームに乗ってやる必要もないと思っいらっしゃるのか、いかがですか。

アジア諸国をもっと注目しよう

星野 そういろいろなご意見はもちろんです。ただ、修学旅行も中国や韓国を含めて考えてはどうかというようなご意見はだいぶ前からあります。これはいまままでに増して準備が必要ですし、そこまで踏み切れないでいるというのが実情じゃないかと思えます。

アメリカとかヨーロッパかということになりますと、費用などの点から全員を連れてい

くということは、いま無理ではないかと思えます。学校がある程度責任をもって推薦するというのを考えてもいいんですけども、非常にいろんな団体がございまして、それを一つ一つチェックするわけにもいきませんので、いまは保護者のほうの申し出があったらそれを認めるという形で終わっております。特に学校のほうからそういう推薦をしたりするようなことはしていないのが現状です。

山本 現在、高校でわりあい韓国に行くところもあるようです。

星野 はい。

山本 中国はそうたくさんじゃないんですけど、いまのところは。

星野 私学ではかなりふえているというところは聞いております。

近藤 私の娘のところなんかはミッションの学校ですけども、香港に行く修学旅行のグループと韓国に行くグループと分けて行っているみたいですね。ホームステイ・プログラムもあって、やはりアジアの問題に対するわれわれの認識をもう一回新たにしなければならぬというか、学校自体の教育プログラムというか、それがあみたいですね。みんなヨ

ロッパ、アメリカと。まだ私のところはアメリカとイギリスと、短期大学部ではイギリスに行くんですけど、その二つのプログラムしかありませんけど、やはり学内的にはもっと身近なアジアの問題とかフィリピンの難民の現実とか、かつて日本が植民地化していた韓国人たちの本音が聞ける場所とか、そういうものに対する再認識が必要なんじゃないか、そういうプログラムもあっていいんじゃないかというようなことは出てます。

山本 ぼくもね、実はイギリスもアメリカもそれぞれ一年ずつ留学しましてね。それからあと考えてみると近所のこととか、中国はもろろん三カ月ぐらい行きましたけど、これは見学だけでして、あんまり自分自身が気がついてないんだけど、やはり勉強するならばイギリスとかアメリカとかという観念がちやんとあって、と思っましてね。一ぺんとかく、まあ中国へは短期の旅行で中国を見て廻ったのですが、韓国も、あるいは台湾も行ってみたい、行かなければならないなアと思うんだけれども、なかなか思うだけでね。

西尾 私はだからそれを実行しましてね。

山本 西尾先生はね、韓国の釜山大学の客

員教授でもあられる。

西尾 在外研究として、私が韓国へ行ったのが初めてじゃないかと思ってるのです。

日本では韓国の法律を勉強する人はとても少ないもんですから。考古学とか経済学はわりと多いんですけど。これはまたあとで——(笑)。

山本 そうですね、ぜひ。

西尾 こういった校外活動が順調に行われておればそれでいいのですけれども、何か事故のあったときというのが常に念頭にありま

すので、そういうことを予測して気持ちの上でも備えておくことが必要じゃないかと思うんです。特に校外活動が海外にまで及ぶということになりますと、なおさらいろんな問題があると思う。というのは、そういった仮に事故が起こった場合に、学生、生徒や父兄に対して学校あるいはその教職員がどのような責任を負うか、あるいはまた教職員自身が何か事故に遭った場合に、学校との関連においてそれをどうするのか。というのは、この間の例の教職員組合のピラを見ますと、そういったゼミ旅行なんかに行つて教職員が何か事故に遭ったときに労災扱いができるかどうか

というようなことがちょっと書いてありましたので、それが念頭にあったのでここで申し上げるんですけども、いままで幸いそういうことが同志社ではなかったかと思えますけれども、そういうことも含めて対応を立てておくことが校外活動について必要なことじゃないかと思つています。

山本 そうですね。ほんとそういうこと、労災でもそうですけど、このごろ労災の幅がずいぶん広がっているからね。そういうこともやはり皆が知つておいて、その上で何かいろんな計画を立てなければならぬということもありましてね。

西尾 そうなると、当然私は冒頭にも述べましたように、そういった校外活動と学校の教育とのつながりが問題になるかと思ひますけれども。

山本 いま、同好会というのが非常に多くなつておつて、いまおっしゃったように、要するにみんなで行つて何か制限されるのは嫌だということ、同好会がどんどんふえてきてね、その同好会がいろんな問題を起こす可能性というのはよけいあるわけですね。同志社大学の同好会のテニスクラブというの

は、恐らく二、三十あると思ひますよ(笑)。しかもこのごろ、それが私は同志社大学の学生だという帰属意識よりも、よその大学と一緒になつていっているんですね。ああいうものほどいうんでしょかね。同志社大学のクラブだとは言えない。

それは話がちょっと違ひますけれども、明らかにそういう問題も、インター・カレッジの問題というのたぶん今後はどんどん出てくると思うんですね。だから、これはうちの同志社大学のクラブではないから、というふうにはなかなか言えないような事故も起こつてくるような気がいたしますが、きょうの主題とはちょっと違ひますので、「旅行と学校」、「旅行と勉強」とかということについては一応こういう形で、大体皆さんにお話ししたいだきました。

西尾 私も校外活動といえはやはり旅行ということが念頭にありましたので、それに基づいていろいろ発言をさせていたいただきました。

山本 どうもありがとうございました。

(一九八八年七月十六日収録、於有終瑠担当理事室)

神は民を散らされ、その言葉も散らされた

— 大学生の海外研修について —

齋 藤 勇

本州南端潮岬の最先端に立って眼の前に広がる太平洋を望見したことがある。そしてまさに地球はまるいと思った。海原は前方だけでなく左右にも広がっていたのでそのように感じたのであろう。でもその時の地球のまるさの感触は平面的であったが、後年月の砂漠から撮った宇宙に浮かぶ球状の地球の写真に接して、地球は立体的にまるいということを否応なしに認識させられた。さればこの異世界から見て小さな球状の地球に居住する我々人類すべては同質世界の同胞ではあるまいか。ところがこの小さな同質世界に住む人類の言葉がどうして違うのだろう。おかげで我々はこの地球上でのいわゆる外国の言葉の学習に大変な時間を費している。これは時間の無駄なのだろうか。

旧約聖書「創世記」十一章にバベルの塔の話がある。人間は「町と塔を建てて、その頂を天に届かせよう」と発想して塔の建設にとりかかる。神の座を手になしよとしたのである。その頃は人間はみな「同じ言葉」を話していたそうで、おかげで土木工事の各パート

の意思疎通がうまくいき、工事はどんどん進捗した。神はこのことを懸念され、人間の言葉を乱し、散らして相互の言語を不通にされた、という話である。我等下司が勘ぐると、もったいない話だということになる。ところがこれは、まさに神慮遠謀であった。人間相互の言語が不通であるがゆえに、人間はその疎通のために大変な努力をすることになる。地球上での異質の世界の理解が、決してバベルの塔建設途中までのようにてっとりばやいものではなく、大層めんどりで、苦しい営みを伴うということになった。それは我々に異質世界の言語や百般の風俗を、まなびとる、という謙虚さを求める。いや本来そうあらねばならない、という神からの当為が与えられたわけだ。そもそも、まなぶということは謙虚さを前提としているのだから、春秋の筆法をもってすれば、神による、共通の人類語への邪魔だてが（ご介入というべきだろうが）、散らされた言葉とその言葉を話す人々の精神の仕組みをまなぶという謙虚さを要請することになったわけだ。

昨今、若い人たちの海外渡航が目立っている。新婚旅行のごときのもので海外へ、というのは常識のようになって、戦中戦後の生活の苦しい時代に青春期をもった人々を詠嘆させている。大学生諸君も(自由な身分である間に)海外へ個人で旅行したり、長期や短期留学したいという希望を実現させている。この学生の海外渡航は個人的なものばかりでなく、大学自体が海外に(主にアメリカ、イギリスに)分校を設立したり姉妹校を求めて、制度として決ったシーズンに学生をそこに送りこむという計画がどしどし実行されている。私立の中等教育機関でも生徒を海外修学旅行をさせたり、研修滞在させたりしている現状である。

学生の海外留学、研修、旅行、その功罪はと、もし親御様などに問われるならば、私は即座に、罪^{ざい}などあるものか、と答えることだろう。罪^{ざい}、それはあるとしても極めて瑣末なものだ。ひとり旅の危険、留年のおそれ、それはあるでしょう。そのまま該海外国に居座って帰ってこないのではないか、婚期を逸するかもしれない、その恐れもあるでしょう。しかしそういう罪^{ざい}は、渡航者の人間形成や世界の将来という観点に立つと、まさに雲霧消してしまふ。それほど海外で時を過すということは貴重な経験だとわたしは考えている。それは先程申しあげたようなまなぶという謙虚さを否が応でもその人に教えてくれるからだ。国際感覚、国際的視野、国際協調と最近では新聞雑誌でも何か特集すると国際ナニナニという言葉は合言葉のようにとび出して、まるで抽象観念のようになっていたが、その実体は一向に(と)言つては極言であらうが)把握されていないのではないだろうか。異質文化圏へ行って、見て、生活することは(そ

れはその国の人と話すということを前提としている)、理屈抜きでよろしいのである。それが一番でっとり早い、というのではなく、一番苦しい。その故にこそまなぶという苦しみ^が謙虚を生み、理解しようとする努力が対象や人への愛を育む。

わたしたち日本人は、日本という場所と、その現代社会という同質の世界に生を営んでいる。したがって最終的には、時間的、空間的に、今、ここ、という自への関心と理解が中心に据えられるのは当然のことであらう。しかし、自の理解を強く意識すればするほど、その自が足下からどんどん遠のいていくという実感をしばしば経験する。変に三割台の打率とか優勝を意識すると、かえってその打者も関取も、精神がこわばって、それが肉体のこわばりに至るであらう。そういう時にはスポーツマンはよく居直ってしまうという。どうなりとしてくれということだ。それはもはや自分にこだわらず、自分を他者の目から見ようということである。自分を客観化してしまうことだ。この自を他の目から見るという精神転換は大切なことのようにだ。国際感覚というのは実は自の理解のために他の文化的、風俗的視点から自をうつし出す姿勢である。自と他の区別が大きければ大きいほどその差が顕著に目立つがゆえに、そのコントラストが自をくつきりさせるわけだ。だから自を理解するには自との差が時間的にも空間的にも大きいほどよろしい。時間的に過去社会に立ち入って、今の時代と驚くほどかけはなれた観念に到達することに歴史研究の意味がある。場所的には日本と、その文化も風俗も桁はずれに異った国に接することに国際感覚養成の秘訣があるように思う。日本の現代社会では考えも及ばない、当りまえでない現象

が、当りまえのこととして通用する社会に身を置くことである。それによって必然的に二つの視点を同時的にもたされることになるのではなからうか。つまり自分の文明の側からの視点と、異質な文明の側に立って自分の文明をふりかえる視点である。我々の通念や常識、我々の言葉や方法では容易に理解しがたい内容をもっている社会との対比の認識。これが国際感覚養成の第一歩であると思う。よく外国かぶれといつてそういうかぶれた人を蔑視する傾向があるが、私をして、いささか逆説的に、言わしむると、外国へ行ってその国振りにかぶれて帰ってこないようではなんのための外国行きか、ということになる。それほど、他の、異質の社会に自らを託した証拠である。その他にあたかもそれが自であるかのようにいったん没入してしまわなければ、どうして自を照しだすことができようか。

人間誰しも自らを愛する。自分の視点だけを大事にする志向をもつ。ところが、他の理解は他への愛をも生む。他の視点への執着を生む。こうした二つの視点がいかに青年たちの人間形成に深くかかわっていることか。ドイツ文学を学んでいる人はドイツを愛する。イギリス文学を専門にしている人はどうしてもイギリス人を眞眞にする。アメリカ文学に親しんでいる人はともすればアメリカ寄りの意見をもち出す。フランス文学を生涯の友としている人はフランス的思考方法に執着する。それでよろしいのである。そういう世界から日本を見ることができずからである。太平洋戦争中、日本の軍閥政府は英語を学ぶことを禁止もしくはそれに消極的になった。自ではなく、他の思考方法が介入することに危惧を感じたのである。一つの視点しかもてなかつたということで、自の腹中で他の視点を養

成することができなかったわけだ。

異国家、異民族がこうして複数の視点を相互にもち、相互に謙虚になり、相互に愛しあうためには、最低条件として、話しあうということがある。そういう見地からわたしはかねて海外に旅行するにしても団体観光旅行は、(しないよりはままだが)、あまり好まない。それは異社会の人と個人的接点をもって話しあう機会がすくないからである。ツアーから帰ってきて、外国語なんか話せなくても結構やっていけるよ、わしゃ一言も話さんかった、と豪快に肩をゆすって笑いとばし、そそくさと入湯、お茶漬、梅干に舌鼓をうつことを好まない。異質の社会の土地での点と線を辿ってきて、その社会の人々に遠くから犬のように尻尾をふってきただけだ。訪ねようとする、または滞在しようとする国の言葉を学ぶことは最低の条件である。話しあってこそその国が分る。なにげない一瞬に、その国の精神性が垣間見られる。

ロンドンの市内で、セント・ポール寺院を尋ねて道に迷ったことがある。通りがかりの婦人警官に道を尋ねた。「道に迷いました、セント・ポールへの道を教えてほしい。私は今、いわば迷える羊です」と冗談気味に言ったところ、にっこり笑って即座に「教えてあげましょ。でもその前に告白しなさい」と返ってきた。イギリスはキリスト教国である。今は新教国だが、十四、五世紀頃まではカトリック教国であった。カトリックでは教会といえは痛悔、告白、償罪をするところ。それは人生という道に迷った人の行くところ。比喩的には迷える羊の行くところである。そこでこういう冗談が返ってきたのだ。お巡りさんでも、というとおかしいが、こういう古い

習慣には敬意と関心をもち、それを得意即妙の冗談の中にくりこんで返しているわけだ。ここに私はイギリス人らしい生活感覚を一瞬間間見たおぼえがした。こういう経験が生活の会話の中でくりかえされ、つみ重ねられる。次第に雪だるまのようにふくれあがっていく。そのための当該国の言語学修が必要だということだ。それは相手国の人に対する礼儀であり、謙虚である。もちろん、二十一世紀に活躍することを約束されている昨今の若い人々はこれくらいのこととは先刻ご承知である。そこで英語学習ということに最初は躍起になる。それも英会話に焦点をしぼる。

なぜ英語、といってもこれはどうしても仕方がない。現在地球上で約六億の人間が英語でものを書いたり話したりしている現状を、是非を抜きにして考えると仕方がないのである。巷の人々は、まるでパン焼機にパンを入れてセルフ・タイマーをセットしておけば、時間がくるとボンとパンが焼きあがるように、大学の英文科さえ卒業すれば英会話がうまくなっているかのように錯覚していらつしやるかもしれないが、街の人が考えている英会話というものは大学の正規のカリキュラムだけで完成するものではない。それでは英会話とは何か。「いい天気ですね」、「一雨来そうですね」、「お茶でも一杯いかが」。たしかにこれらが英語で伝達されれば、英語による会話であるが、国際的視点からいうならば実に瑣末の意志疎通である。本当の英会話とは、発音は下手でもいいから（上手にこしたことはない）、流暢でなくてもいいから（流暢にこしたことはない）自分の意見をとにかくも表現できること、相手の意見を理解できることにあるように思う。自の文化を語り、他の文化を知るための会話であ

るべきだろう。訥々ともよろしい、文化風俗の相違を語りあうことが必要である。いたずらに西洋人の身振りや片言隻語の言いまわしをおぼえても仕様がなない。そのために何かが必要かというところ、話す材料をたっぷりもっていること。その材料たるや自国の文化の知識と、相手国の人に責任をもって日本を語る心構えである。英会話が真の英会話たるためには、英語の勉強だけではなく、日本の文化の勉強もおかねばならないという理屈になる。日本の異文化、異風俗に接して、あれなんだ、これはどういう意味かという外人の質問に「アイ・ドント・ノウ」とか「アイ・キャン・ノット・テル・イット」をくり返しているばかりでは困るのである。知らないものがきつと調べて知らせてあげよう、というくらいの姿勢がほしいものだ。英会話上達には、他の言語、他の文化の知識と理解のみならず、自の言語、文化の知識と理解をも必要とする。自他の立体的知識である。つまり自の文化に対しても謙虚にまなぶ姿勢が必要だ。そうなる分野に晒されている佛像にさえ見過しできない気持が湧いてくるはずだ。

地球はひとつ、人類は皆兄弟と簡単にしめくれない亀裂や断絶が国と国の間にある。むしろその違いを正確に見つめることから理解や友情が生れる。そういう意識を大切にして海外に出かけていく必要がある。留年や婚期おくれなどは小さな問題だ。

つまるところ、たんに英語だけではなく、百般にわたる健康で、執拗な好奇心を発揮し、（大学で）勉強しておくことが必要だということになる。自を知るために他の勉強、そのための英会話学習であったものが、その英会話学習には自を知る必要がある。堂々めぐ

りのようだが、この堂々めぐりをくりかえすことだ。何をやるにも大学生たるもの勉強が必要だ。勉強をしていない若者には海外に出かけてほしくない。海外旅行や修学に罪ありとせば、罪は勉強もしないでのこのこ出かけていくという自他に対して無礼な行為である

う。
人類をしてバベルの塔建設を挫折せしめた神のご意向は今もって生きているのである。
(大学文学部教授)



新島襄の色紙の影本を頒布

新島襄の書簡・色紙などの遺墨に接する機会は少なく、せめて複製された色紙があればこのご要望に応じて、つぎの、三点を作成頒布しています。

この色紙は、明治二二年秋から二三年春にかけて、その心情を吐露された詩歌の遺墨の中から選んだもので、同志社関係者は勿論、一般社会にも広く訴えるものがあると思えます。

◎ 色紙(影本)

一葉 一〇〇〇円(送料一七〇円)

(A) 「時危思偉人」

明治二二年一月徳富蘇峰の依頼に応じて揮毫されたもの。

(B) 「不止月下併能越 豈涉八州是我分

壯図却促男兒涙 滴々跋為縷々文」

明治二二年二月新潟伝道に従事していた卒業生広津友信におくられた詩。

(C) 「送歳休悲病瀧身 鷄鳴早已報佳辰

劣才縦乏済民策 尚抱壯図迎此春」

明治二三年一月一日大磯百足屋で新春を迎えて詠まれた詩。

◎ 購入ご希望の方は左記へ、直接電話または文書でお申し込みください。

◎ 代金および送料は現品送付の際、振込用紙を同封しますから、後日ご送金ください。

同志社収益事業課

京都市上京区今出川通烏丸東入る
電話(〇七五)二五一―三〇三七・八

海外研修に思う

鴛 淵 紹 子

大学における校外教育、あるいは校外活動を考えるとき、大きく二つに分けられる。すなわち、(1)大学側が企画・立案し、評議会、教授会などの議決、承認を経て学生側に提示し、希望者をつのり、選考して実行に移すもの、(2)いわゆるクラブ活動のように、学生の自主的な集まりから出発し、学校側の協力、援助、あるいは指導を得ておこなうものである。(2)のような課外活動、クラブ活動は全国ほとんどの大学で、昔からおこなわれており、男子学生の場合、クラブ活動で学び、経験したことがのちに本職になっていく例も少なくない。それに反し、(1)の例は、最近になって多くの大学で、とくに海外においておこなわれるものが多い。

同志社女子大学では、一九八〇年度より、学生の海外夏期研修プログラムとして、アメリカ、ヴァージニア州の歴史ある女子大学、メアリー・ボールドウィン・カレッジ(MBC)でのサマープログラムがはじめられた。さらに一九八七年度からは、短期大学部学生のための夏期研修プログラムが、英国ケンブリッジ大学の一つのカレ

ッジを舞台におこなわれるようになった。MBCでの研修は、四年制学生の学部・学科を問わず二、四年次生に開かれているプログラムであり、一般教育科目の『言語と文化 B』の単位が与えられる。ケンブリッジでの研修は、短期大学部二年次生のためのものであるが、英米語科、日本語日本文学科の学生、いずれもが申し込むことが出来る。今のところ、単位とは関係ないが、学校側が責任をもって、引率し、送り出している点は同じである。さらに、一九八八年度からは、英文学科、音楽学科の学生を、米国マサチューセッツ州の名門女子大学、スミス・カレッジに一年間派遣する留学生制度、短期大学部の卒業生をMBCに三年次編入学させる制度が生まれた。これらのことは、国際性ゆたかな学生を育てることを、立学の基本理念のひとつとしている女子大学にとつて、きわめて望ましい制度であり、私個人として、大いに歓迎している。専攻のいかんを問わず、若い時に集中的に語学を訓練すること、現地体験をすること、これは私が常に学生に望んでいることなのである。

ある程度、経済的に余裕があり、本人にやる気さえあれば、簡単に国外に出て勉強の出来る現代である。テレビ、衛星放送の発達により瞬時にして、居ながらにして、世界中の情勢を知ることが可能である。これは素晴らしいことである。だが、あまりにも豊富な情報と視覚に訴える刺戟の多さが、逆に何もしないのに、したような錯覚におちいらされる時代でもある。しかし『百聞は一見に如かず』いかに多くの情報を耳目にしても、実際、その土地に足をつけ、「見る」「感じる」ということはいつの時代においても変らぬ重要なことではないだろうか。私は音楽学科の学生にいつも云っている。『音楽作品は、作曲家たちの生まれた国の歴史、時代背景、風土と関連なく生み出されてくるものではない。だから、一度は自分のもつとも関心のある音楽、また作曲家のふるさとを訪ねてきてほしい。』どのような空気の中で、風土の中で、また人々の中からそれらが生まれてきたのか、肌で感じてきてほしい。音楽に関する数日間、数週間の公開講座や講習に出席するのもよいけれど、出来ることなら最低一年間は、その場所に滞在して生活をしてほしい。いわゆる観光旅行では、その国の一番よい時期に、よいところだけしかみられない。気候のわるい時期、またその移りかわりを体験し、さらに音楽がその国々、地域で、人々の生活とどのように結びついているかを実際にみてきてほしい……』と。世間の多くの人々は、音楽の学生が海外にゆく場合、「音楽は世界共通のことばだから、少々、語学が出来なくてもよいでしょう。」という。しかし、その国を知り、人々と共に生活しようとするとき、やはり基礎となるものはことばである。

語学を集中的に勉強することは非常に効果の多いものである。日本国内のことではあるが、かつて私自身、夏休みに二年つづけてある外国語の集中講座に出席した。若い頃のことでもあり、毎日、予習、復習し、講座に出て、三週間でわれながらよく勉強したなど、その時は素直に思つたものである。語学研修を主としたサマープログラムのメリットの第一はここにある。ただし、日本での集中講座は終ればその言葉を使う機会も少なく、忘れる一方であるし、また日本人の学生ばかりでの研修では、あとの時間のすこし方に問題があるだろう。一日の行事がおわり、寮でくつろぐ時、つい日本語を使ってしまうだろうし、その国の人と交つても、憶怯になればしゃべらないというようなことは、容易に考えられる。

女子大学の場合、学生にとって、きわめて有益なこれらプログラムを計画し、受け入れ先の学校との連絡をとったりする大学側の準備は実に大変なことである。しかし、学校側が企画して責任をもつて連れてゆくということ、学生の親は全幅の信頼感をもつて下さる。何人かの父母の方から実際にきたことである。私は夏期研修に関して、直接かわわっていないが、昨年、音楽学科の合唱団を演奏のためにアメリカへ引率していったとき、つくづく感じた。「先生も行って下さるのでしようね。それなら……」と父母の方々にいわれ責任の重さが一挙にのしかかってきた。無事故で、よい演奏をして帰ってきたからこそ、楽しかった、学生達にとつてよい機会だったと非常に喜んでいるが内心は気の重い十日間であった。それだけに、毎年、夏期研修のために早くから準備し、学生の引率、指導に当られる教職員の方々には心から感謝している。

女子大学発行の「しばくさ」第二十号に、一九八〇年度の第一回海外研修に参加した学生たちの感想文が掲載されている。「イエス、ノーをはっきりいうべきこと」「頭の中で考えていたことと実際との違い」「ことは遠慮なく使うべきこと」「自分の意見をもって、互いに主張し合う、また学び合うべきこと」「アメリカ人のユーモア精神について」など、彼女らなりに感じたことをこもこも書いてあるが、これらは始めて外国へ行ったときの正直な感想であり、今年の人たちもおそらく同じような思いをもって帰ってきたと思う。

ABCへの研修には、数は少ないが音楽学科の学生も参加している。彼女らにとって、これだけがきっかけであつたとはいえないだろうが、この時の英語を使つての海外学習体験がのちに大きく生きている。結婚した相手の家庭の仕事の関係もあり、国際交流に大いにその経験を役立たせているA子さん。同じく結婚した相手の方の留学で、現在アメリカ滞在中のB子さん。そして、二年のときMBCの研修に参加し、今回、新しい留学制度の第一号に選ばれたC子さん。彼女らにとってサマープログラムは大きな刺激になったに違いない。

語学の勉強は、今では一昔前には考えられなかった程やりやすくなっている。もし、NHK第二放送を一日中、かけ放しているとすれば、早朝より夜おそくまでの間に、英・独・仏・スペイン・ロシア・中国・ハンガール語など、世界の主なことばを、テキスト片手に勉強することが出来る。要はやる気である。ここで一言触れておきたいことには、いわゆる旅行社や民間団体の計画する語学研修がある。それらの中には最近、さまざま問題を起しているところもあるよ

うだが、これは主催者側の企画性、実行力、責任のとり方と同時に、学生側の態度にも問題があるのではないだろうか。音楽学科の教え子の一人、Mさんは、女子大学とは関係なく、自分で語学研修の情況をつぶさに調べ、TOEFLも受け、まず一年間、アメリカで英語の研修をおこなつた。そして翌年秋からは、正規の学生として勉強をつづけることになった。彼女のいうには、「どこでもよいというのでなく、本当に数多い語学研修案内から、徹底的に自分にふさわしいところをみつけ、積極的にやつたのがよかった」とのことであつた。

女子大学の中で、私自身が接している学生は、ほとんど音楽学科の学生なので、ここにあげた例は、きわめて限られたものであるが最初にも述べているように大学の海外研修制度、留学制度には、積極的に参加してほしいと常々思っている。そして、今、女子大学の海外研修は、英語が主であるわけであるが、音楽の人間も、英語は大いにやつてほしいと思つている。つい先日、一人の卒業生に出会つた。彼女は、学生時代には外国に行つてまで勉強しようと思つていなかったが、卒業後、あるきっかけからヨーロッパに留学し、その後、かの地で教えながら、実際の音楽活動をつづけている。その彼女が『ヨーロッパでもいろいろな国で実際に演奏活動をするとき、英語は大変必要です。学生時代、もっともっと英語をやつておけばよかつた」と今になって思います』といつていた。

いかに日本語ブームであるといわれても、本当の意味で日本語が正しく通じる範囲は限られている。留学するには、何よりもその国のことばを勉強していつてほしい。私などが学生たちに『若い中は、

やろうと思えばいくらでも出来る時代、とくに語学はしつかりやつておきなさい」といつても、大抵の場合、また先生はあんなことをいつている：位にしか思ってくれていないようである。しかし、私は、かつての自分が悔を残した語学の勉強、そして今も絶えず痛感させられているその必要性を、若い人たちに少しでも早く、事実と

追悼集 I

(同志社社史資料室編・発行)

——同志社人物誌——明治十年代～明治四十年

追悼集 II

(同志社社史資料室編・発行)

——同志社人物誌——明治四十一年～大正四年

同志社では明治二十年ころから、社長(総長)をはじめ役員、卒業生、教職員、学生生徒が永眠すると、その死亡記事とともに、追悼のことはや故人の略歴などを各学校の機関誌(たとえば『同志社文学』『同志社女学校期報』『同志社校友会会報』『同志社時報』など)に掲げて哀悼の意を表してきた。

その貴重な記事は、これまで古い機関誌の中に埋もれていて、極めて利用しがたい状態にあったが、社史資料室は昨年来、それらの記事の総てを採り出して書物にまとめる作業をおこなってきた。

一九八八年三月に出版された第一巻には、新島襄、山崎為徳、

して受けとってほしいと念願しているのである。少しでも多くの学生が、積極的に他の国の文化や風土に実際に触れる機会をもつように、海外研修、留学制度の問題には深い関心をもちつづけている。

(女子大学教授)

山本寛馬、森田久万人、片岡健吉らの他、男女各校の関係者約一〇〇名の記事が収録されている。

ついで、一九八八年十月に第二巻が出版された。これには、J・D・デイヴィス、元良勇次郎、市原盛宏らに関する記事の他、第一巻以降の年次に機関紙に掲載された新島襄、山本寛馬、松本五平らの資料も収録されており、約一一〇名の記事を集めている。

この『追悼集』は、原則として一年一冊のペースで刊行され、太平洋戦争中の戦没者の記事に及ぶ予定である。

『追悼集』は、それぞれ何らかのかたちで同志社史を彩り、また同志社史を築いてこられた物故者たちを記念するものであるとともに、「同志社人名録」の役割をも果たすであろう。

第一巻 A5判 三五〇ページ

第二巻 A5判 三八三ページ

頒価はともに一五〇〇円

『追悼集』は各巻とも同志社収益事業課で取扱っている

電話(〇七五)二五一—三〇三七〜八

同志社高等学校が修学旅行を中止した経緯

上田 堅一郎

現在、多くの高等学校や中学校で修学旅行が実施されているが、同志社高校では行なっていない、以前実施されていた修学旅行がいつ頃どんな理由で中止されるようになったのか、その中止に至る経緯について書けということと、更に、現在いろんな学校で実施されている修学旅行についての意見を述べよというのが私に与えられたテーマであります。

本校が修学旅行の廃止を決定したのは昭和三十八年二月の教員会議においてであります。その経緯に入る前にそれまでに行なっていた本校の修学旅行について簡単に述べたいと思います。本校で修学旅行を実施したのは昭和二十四年の六甲日帰り旅行から、最後の旅行となった昭和三十九年三月の北九州旅行まで十六回であります。旅行先は

昭和二十四年 六甲へ日帰り

昭和二十五年 高松一泊

昭和二十六年 北九州四泊

その後、北九州または南九州と九州方面に限られていましたが、期間は六泊ぐらいになったと思います。また、実施時期も最初は三年生の一学期に行なっていました。また、旅程が一週間ともなれば、授業との関係でこの時期の実施は難かしく、二年生終了時の春休みを利用して行なうようになりました。旅行の形態としては最初の頃は学年全部が同一旅程で行なっていました。後には輸送機関や旅館の手配の関係上、学年を二班にわけ一日ずらした日程で行なうようになりました。しかし、どちらの班においても見学先などは全く同じで、全員が同一の団体行動を取って行きました。最近多くの学校で試みられているテーマ別、自由研究的な小人数単位の班別の行動はとらせていませんでした。今から見れば古い形態の旅行だったかも知れませんが、それでも第何回目の旅行であったか、長途の旅行といえは汽車でゆくものと相場がきまっていた昭和二十年代に、始めて大型の観光バス数台を連ねて熊本から別府まで九州横断の修学旅行をしたことが画期的なこととして写真入りでその地方の新聞の紙

面を賑わしたことを思い出します。

本校でこの修学旅行廃止を決定したのは前にも述べたように昭和三十八年二月ですが、それはよくあるように、何か大きな事故があつて中止せざるを得なくなつたとか、不祥事の結果、実施を自粛したとかいうものではなく、学習指導要領の改訂に伴つて学校行事の整理を検討した結果なのです。本校では昭和三十六年頃から学習指導委員会を中心にして、当時の所謂三八改訂、即ち、昭和三十八年度よりの高等学校学習指導要領の改訂に備えて新しい学科編成の検討をしておりました。そして、それらの検討は単に教科、科目の時間配当をどうするかということだけに止まらず、評価の在り方、出席及び落規定、学力テストの見直し等あらゆる面にわたつて行なわれました。それら一連の作業の中で、従来から習慣的に毎年実施されていた諸種の学校行事の整理統合をしたのであります。学校行事というものは最初それが計画された時には一つ一つそれなりの必要性があり、教育的な意味をふまえた上で実施されたものであつても、何年か経つ間にその必要性が薄れたり、また教育的な意味を追求するよりも、去年もやつたからと単に行事を消化するという安易で毎年継続してきている面のあることが否めないという観点から一つ一つの学校行事にあらためてその必要性を確認し、教育的意味を再検討したのであります。修学旅行も学校行事の一つとして俎上に上り、三十八年度新たに入学して来る新入生から廃止をするということが確認されたのであります。

この修学旅行の廃止をめぐる当時の生徒会の新聞部が学校側に理由説明を要請した座談会の記事が手元に残っていますので、多少

重複する部分もありますが、できるだけ原文のまま紹介してみたいと思います。

「司会」校長先生より廃止理由を説明していただきます。

「校長」修学旅行の廃止は教員会議で決定したわけですが、まず歴史を述べますと、明治三十八年から終戦後の昭和二十三年まで、同志社中学(旧制)ではやっておりませんでした。その理由としてふつう修学旅行といえはその目的地が京都であつたこと、それに物見遊山的であり、必ずしも良い事のみを覚えないうこと、また都会の子供特に同志社の人は裕福でいつでも行けるといふことです。昭和二十四年となりまして、その当時終戦後の高校生には全然夢というものがありませんでした。団体生活自身、上から押さえつけたものでした。そういった生活に潤いを持たせるために、本校としては思い切つて、六甲に一日の修学旅行を始めたのであります。この辺の事情はよく諸君知つともいらいたい。こういう寂しい時代には、本校としては積極的に、諸君に言われぬ先には体勢を取つたのです。恐らく全国に先駆けた修学旅行だつたと思つております。但し、六甲に自動車を連ねて三年生がいっただけであります。その翌年二十五年は高松へ一泊したのであります。その後ずうっと続け、最近の数年来いろいろの事件が起る毎に、修学旅行がよいかどうか、当初二十四年に出発した時の考えであつて良いかどうかという問題が常に先生方の中で出ていました。それで、突然起きた問題ではないわけでありませう。そして、その都度根本的な問題に入つて考えたわけでありませうが、三十五、三十六年の時、前校長の茂先生の時に一

回これが出まして、止めようではないかと十分に考えました。その時は、父兄の方にもアンケートをとった事を覚えております。但し、これには生徒諸君が父兄にハッパをかけて賛成と書けといった事などを、後で父兄の人から聞き、あのアンケートはたいして意味がないんじゃないか、本場の立場で父兄から聞いたことにはならないのではないかと思われ、十分な結果は得られませんでした。三十八年より高校のカリキュラムが全面改正になったのです。それは、諸君も御承知の通り、今の二年からであります。そのために学習指導委員会というものが本校に前からあったのですが、二年前の三十六年四月に、この学習指導委員の先生によって、新カリキュラムの立案をはじめたのです。即ち、三十八年から施行される新カリキュラムの施行にあたって二年間かけて準備をやったのです。それも他の学校は一年あるいは半年でやったところもあるようですが、我々としては良心的に、先生が文部省の役人とも会い指導委員にも会い、いろいろの手を打ったわけでありませう。その内容の一つとして学校行事のあり方と整備に検討を加えたのです。その一つとして修学旅行も考えたのであります。その結果慎重に審議しまして、いろいろな良い点悪い点の比重を比べて、長い間の討論の結果、廃止に踏み切ったのです。その理由。

一、交通事情の悪化。

あれだけバス、汽車に詰め込んで、高校生として意義のある旅行であるか、それだけの体力を使う必要があるかということの問題にしました。

二、目的が、修学という意味にそぐわないと思えます。単なる物見

遊山であります。

三、但し、集団の懇親ということについては認めております。一団で旅行して良い思い出を作る事には、決して学校は意味なしと言ってはおりませんが、その思い出がそういう形であって良いか、これは反省しなくてはならないと思えます。学校生活とかけ離れた行事ではないかという意見も出ました。思い出、友人との懇親は良いものであります。大体旅行というものは、朝日新聞に、重松氏という評論家が時代錯誤の習慣、窓越し観光では無意味、むしろ、危険な副作用があり、本来の旅行観念を狂わせると書いてあります(三九六、四朝日) わたしはこれ程きつい考えはもっておりません。有益な行事ではあるが、大体旅行というものはある目的を定め、気心の合ったものが少人数で楽しんで行なうものであって、団体でやるのは私も少々時代遅れではないかと思っております。そして、そういった事は過去の遺物であると思っております。それに、昔の先輩が考え出した形のまま、諸君のような裕福な者がなぜ集団の旅行をしなればならないかと思われませう。また、汽車や旅館では夜遅くまで話し合い、例えば九州鹿児島では、バスの中では寝ていて、西郷さんの像の下のガイドの喋り方がおもしろいとか、バスガール嬢がどうだとか、これでは本来の目的や学問的なものを見出すのは非常に薄らいでいると思えます。

四、小さな問題でしようが、運動部の合宿等の関係で全員参加しないのは事実であります。また、必ず事件が起っています。タバコを覚えるのは中学の修学旅行だという事さえ聞きます。このような事件に対する付き添いの先生の労力は非常に大であります。有意義な

ことならなにも労力を惜しむわけではありません。このように、行程の交通事情も合わせまして忙しい付添いの先生方に意味のあるような労力が使われておらぬように思います。これは単に先生方が疲れるからというのではありません。以上、良い面、悪い面を述べましたが、そういう比重を考えた上、廃止に決定したのであります。現在これは変える意志はもっておりません。これは一校長の考えではありません。以上を超えて良い条件が表われ、また新しく諸君の有意義な意見が出てきた場合、教員会議に諮りまして、有意義な事がわかりましたなら行なって良いと思っております。常に、昭和二十四年に全国に先がけてやった気持は私としても失なっていないつもりであります。以上。

このあと、さまざまな質疑応答の記事が続きますが、余り冗長になりますので省略いたします。高橋校長の理由説明からも分るように、本校で修学旅行を廃止した理由は、一つには大人数を一度に移動させるのに決して万全とは言えない当時の交通事情があり、また一方では本来の教育的意義が薄れ、建前をいかに取り繕ってみても結局は物見遊山的な、せいぜい楽しかった思い出としてしか残らない修学旅行の現実、しかも、そのために払うべき付き添い教員の労力が春休みという新年度への充電期に旅行が行なわれたことも相俟って、いささか大き過ぎたことにあると思われれます。実際に私も何回か修学旅行に付き添って感じたことですが、生徒達とその荷物を満載した大型バスが、さして広くもない曲りくねった道を山あいの温泉地の旅館まで下りてゆく時には、よくこれで事故が起らな

いものだとむしろ無事が不思議に思ったことでした。また、多くの学校の修学旅行にゆく時期や場所が重なるため、大人数を宿泊させる旅館を確保するためには、旅行の具体的な計画をたてるに先立って既に一年前には来年のための旅館の手配をしておかなければ間に合わないといった状況があり、従って、教育的に意味のある修学旅行のプランを考えようにも、常に現実が先行してしまっているといういらだちを禁ずることができませんでした。

最近では交通事情や宿泊事情なども当時とは比較にならない程よくなっていると思います。また、各学校で実施されている修学旅行の形態も、昔の様な集団観光オンリーのタイプから、さまざまな工夫がなされ、多様化されていると聞きます。私は特に調べたわけではありませんが、最近の修学旅行は当時に比べて、二つの全く正反対の方向に発展(と)しているのではないかと思います。言葉は適切ではありませんが、一つは大規模化の方向であり、一つは小規模化の方向であります。交通事情、宿泊事情の改善と共に旅行の規模は必然的に大型化し、旅行先も今までせいぜい東北、九州であったものが、北海道、沖縄、はては海外にまで足を伸ばしている学校が出てきています。私はこういった大規模化の方向には賛成しかねますが、私の世代の者が戦前戦後を通じて修学旅行という言葉から受けるイメージからすればこれは当然の発展的向方であるという気もいたします。

また、小規模化の方向としては、学年単位の旅行ではなくクラス単位の旅行にとか、テーマ別のグループ活動の時間を多く取り入れるとか、全員同一コースではなく、小人数の選択コースを設定する

とかいった場合に所謂修学旅行のイメージから脱却した方向に工夫がなされているように思います。勿論、実際に行なってもらえる学校ではそれぞれいろんな問題点を抱えていることと思いますが、私としてはこの小規模化は一つの魅力のある方向であり、修学旅行を廃

(高等学校教師)

新島八重の短冊

新島八重の和歌(遺墨)は、本誌七十四号(一九八三年三月発行)の扉にも掲載されている。その和歌は、戊辰戦争の際、会津若松城に籠城した八重が、城を立ち去るとき、城の壁に書き残した次の作品であった。

明日の夜はいづこの誰かながむらむ
なれし御城に残す月かげ

この七十四号の扉の写真は、八重が揮毫したのを軸装にしたものであったが、今回の扉の写真は短冊である。

すでに『同志社タイムス』四一五号に報じられたように、この短冊は二葉とも尼崎市にお住いの校友・永澤嘉巳男氏から、一九八八年六月十八日に同志社へご寄贈下さったもので、次の和歌が八重の手で揮毫されている。

六十とせのむかしをかたる友もなく
あはれさみしきこほろぎのこゑ

御慶事をきゝて
いくとせかみねにかゝれる村雲の

止した本校が若しも再び修学旅行を復活させる日があるとするれば、私はこの方向の延長上にその接点を求めたいものと思っております。

はれて嬉しき光りをそ見る

「六十せの」作には八十四歳と記しているから、昭和三年の揮毫とみてよいであろう。

ご寄贈下さった永澤嘉巳男氏は、昭和五年に同志社大学法学部法律学科を卒業された方である。氏は大学に在学中、学生たちの手による『同志社新聞』(月刊、大正十五年九月創刊)昭和四年二月、三十六号を以て終刊)の編集主任をつとめられたことがあった。そのとき、D・W・ラーネットの回想録と、新島八重子回想録を、それぞれ自宅におもむいて聞き取りし、それを『同志社新聞』に連載されたのである。

右の二葉の短冊は、永澤氏が新島邸に八重を訪問して談話の聞き取りをされたとき、記念にと揮毫して八重夫人が下さったものだといふ。

永澤氏は昭和四十八年十一月に、新聞に連載された『新島八重子回想録』をまとめて、同志社大学出版部から出版された。その口絵にはたくさんの写真が掲載されているが、その中に、八重の短冊二葉ものをせておられる。

八重関係の資料はあまり多くないだけに、貴重な遺墨だといえる。(河野)